

## 展示空間 / サロンとしての図書館

—  
福島幸宏

(京都府立図書館)

京都国立近代美術館の北側に隣接する京都府立図書館は、1909年に建設された。岡崎地区の永久建築としては早い方で、平安神宮に続くものであった。レンガ造に漆喰で化粧した瀟洒な3階建ての建物に、防火扉も用いた本格的な4層の書庫が附属する構造で、延床面積は約2,500平方メートル。書庫のほかに、大閲覧室、特別閲覧室、新聞室、図案室、児童室、来賓室、展示室などで構成されていた。

今も残る銘板に「明治三十七八年戦役記念 京都府立京都図書館」とあるように、1905年に終了した日露戦争の「戦捷」を記念して建設された図書館で、設計者は後に「関西建築界の父」と呼ばれる武田五一(1872~1938)であった。

この図書館は、開館から20年ほどの間、全国的な文人のサロンとしての役割を果たすことになる。この時期、図書館・博物館・美術館という考え方自体は導入されていたものの、独立した十分な環境の建屋でそれらを運営できるほどの社会的余剰はなかった。そのため、図書館などに展示室を併設する例はままたり、京都府立図書館でも、その3階に長い廊下でつながった専用の陳列室を2つ備えることとなった。

また、1904年から館長を勤めた湯浅吉郎の存在も大きかった。湯浅の兄・治郎は衆議院議員をつとめ、また新島襄のパトロンとして同志社の創設をバックアップしたという名望家であった。湯浅自身も同志社に学んだあと、アメリカに2度留学して聖書研究と図書館学を持ちかえり、また新体詩人としても著名で、幅広い知識と教養を誇っていた。当時としては豪華な陳列室と十分なバックボーンを持った館長、この条件がそろったことで京都府立図書館は全国に名だたる存在となる。

開館当初から、のちの『京都叢書』に結実するような、京都に関する地理・歴史関係図書を総合的に集めた展示を行うなど、展示活動が非常に盛んであったが、その特徴は1911年ごろから顕著になる新傾向の美術への展示に現れる。

竹久夢二の最初の個展が1912年に開催され、岸田劉生の個展も1919年に開催される。また白樺社もロダン、セザンヌ、ムンク、ハイネなどの海外の同時代の美術動向と自らの創作活動をあわせて紹介する展覧会をしばしば行った。さらに写真やスケッチ、図案などの新しいメディアの展示にも積極的であった。そしてこれらに関わった人物や観覧に来た人々が図書館をサロンのようにして集い、様々な情報交換を行っていた。高梨章の研究には志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦、竹内栖鳳、西田幾多郎などの名があがっている。西洋画や小説などにとどまらず、民芸運動や日本画でも新しい潮流が生まれてくる結節点となっていたのである。

しかし、このサロンも黄昏の時期を迎える。まず、中心人物であった湯浅自身が、1916年、その庇護者の大森鍾一知事の退任の直後に退職することになる。湯浅は、在任中から書店との癒着や祇園からの出勤などについて、しばしば新聞紙上をにぎわしていた。また、述べてきたようなハイカルチャー中心の展覧会の展開に府会の反発も強かったのである。湯浅の退任後、数を減らしながらも展覧会は続いていたが、京都市美術館が建設された1933年、肝心の陳列室も書庫に転用されることになり、京都府立図書館の展示空間とサロンとしての栄光の時期は終わりを告げることとなる。

一世紀を経ても、サロンと呼べるようなゆるい繋がりは、各所で観察される。バーチャルに、リアルに。岡崎にもまた新たにその兆しがあり、今後の展開が楽しみである。

京都国立近代美術館賛助会員

特別会員 **水戸グループ** | **FUJIFILM**

一般会員 **ワコール** | **中央信用金庫** | **KYOCERA**

当館は上記の賛助会員の皆様からご支援、ご支持をいただいております。

2017年12月20日 発行 視る492号

編集・発行 | 京都国立近代美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 電話 |(075)761-4111(代表)

編集協力 | 株式会社福本事務所

組版フォーマット設計・表紙デザイン | 大西正一 印刷 | 野崎印刷紙業株式会社

表紙 | 絹谷幸二《黒谷光明寺降臨文殊菩薩 I》2017年 個人蔵

(撮影:タケミアートフォトス)